

特 110

792

七福神禪話

方廣寺派管長 間宮英宗禪師講述

始



凡例

一、本書は臨濟宗方廣寺派管長間宮英宗禪師の講演筆記にして七福神に関する御目出度き禪話也。

二、老師の禪機の縦横なるは今更言ふに及ばず其辯舌の自由なるは速記者と雖泣く所也。

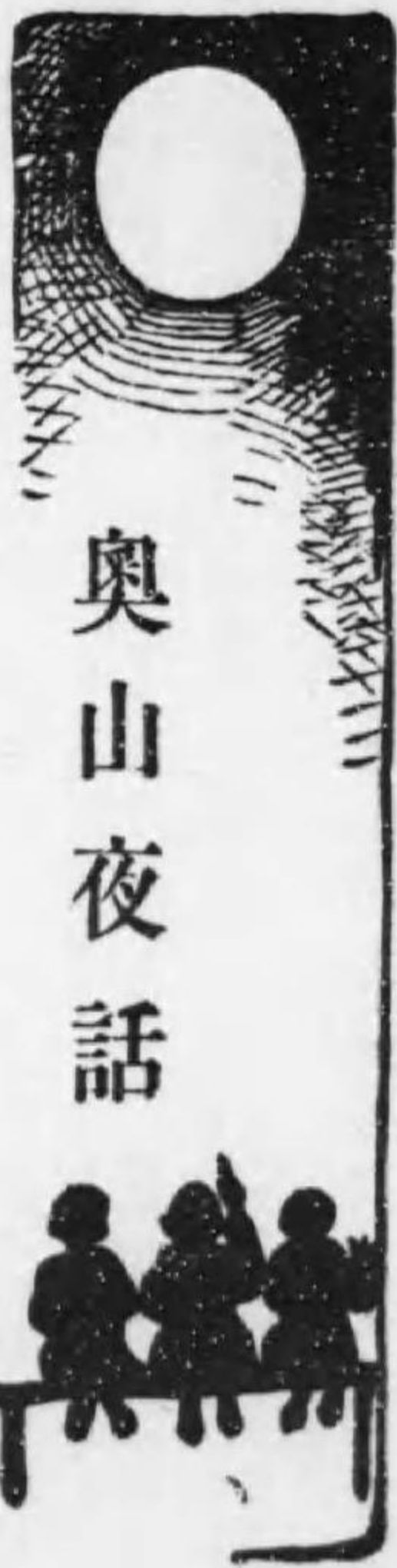
一、されば本記者の未熟の鋭筆の到底老師獨特の說話其ものを其儘に筆寫能はざるは自明の事理にして加ふるに老師は一年三百六十五日巡教のめ殆んど席暖まるの暇なく従て本原稿は檢閲を経ず直に印刷に附されば筆記の不十分なる上に更に又筆者の聞き違ひ書き損じなきを必ずべからず。

一、右豫め老師に拜謝し併せて讀者諸君の諒察を仰ぐ。

大正十一年十二月

編者識

大正  
12. 1. 9  
内交



奥山夜話

七福神禪話 (其の一)

青龍窟老大師講演

本月は御正月のことで、本年の初會でありますから、何にか御日出度ひことと思ひまして、七福神の御話をいたします。

此の七福神は昔から縁起を祝ふ人達には絶えず信仰されて居ります、併し其の信仰の所因には種々あるやうに思はれます、其の事は嘗て或會で一度話した

事があります、爾來七福神の經歷を調べるに色々苦心を致しました、七福神の事に七福神考と云ふ書物を見ると能く分るさうであります、私には未だ見る機会がありませんので、曾て調べた事だけを御話しいたします。

七福神は寶船に乗つて、さうして皆さんの宅へ一月早々寶を擔ぎ込むと云ふやうな譯で縁起をお祝ひになる方である、併し乍ら昔の狂歌にもあります、  
「此の家を七福神が取り巻いて、貧乏神の出所もなし」と云ふことになる、餘り芽出度ない、此の七福神は先づ御承知の大黒尊天、それから惠比壽さん、それから毘沙門さん、辨財天、布袋和尚、福祿壽、壽老人、の七神です。此の中大黒天、辨財天、毘沙門天、の三神は佛教の法を守ると云ふ護法神で印度の天部の神様であります、お釋迦様の法を始終お護りになる誓を立てた神様である、

それから京都で有名な祇園神社となつて居ますが、祇園様の如きも矢張り日本在來の神様ではなく、佛教の天部の神様であると云事です、又金刀比羅様は金刀比羅と書いて「コトヒラ」と妙な工合に讀ましてあります、金比羅様は矢張り佛教を護ると云ふ佛教護持の神様であると云ふ事です、此の大黒天と云ふのはオホク、と通するので大國主命であると、日本の神道者流は云ふて居りますが、是れはさうではない、天部の神様であつて、大黒尊天は矢張り大黒尊天と書かなければならぬ、つまり七福神の中で日本の神様は惠比壽様一人であり、す、少名彥命は惠比壽様としてある、辨財天の事は金光明最勝王經と云ふお經に詳しく書いてある、それから毘沙門天は毘沙門天王と云うて、四天王の一で毘沙門天王經に詳しく書いてあります、夫れから布袋和尚は、支那の奉化

縣と云ふ所の人で、唐の金山に始終居つた人で、其の事歴は後で委しくお話致します。それから福祿壽は少々頭が長かつたか知りませぬが、是れは太山府君と云ふ人で非常に徳望のあつた人であると言ふ話にある、又一説には或る天子様のお庭に妙な頭の長い人が現はれたと云ふやうな傳説もある、壽老人は南極星を象つたもので、同じ星でも支那の方では南極星が一番長く存在すると云ふ事から、支那でな此の星を指して壽老人と云ふのであります

元日や晴れて雀はものかたり  
ほのくさ鳥くるむや窓の春  
草も木もめてた相也今朝の春

嵐 野 貞  
雪 坡 徳



奥山夜話



七福神禪話 (其の二)

もう一度後へ戻りまして大黒尊天と云ふ神様のことであります。これは南海歸寄傳といふ書物に詳しく書いてある、此の大黒尊天は一般に皆様が喜びになるのは、多くは大きな頭巾を冠つて袋を擔ぎ、二俵の俵を踏んまへた脊の低い眞黒な神様を云ふ様であるが、然し同じ大黒尊天の中でも叡山に祀られて

ある大黒尊天は、三面六臂の大黒と云ふて、生やさしい完爾笑つて居られるやうな大黒さんでない、手が六本に顔が三つある、又走り大黒尊天と云ふて宛で猿を干物にしたやうな繪姿の大黒天もあります、此の大黒尊天は福德を司る、又戦争を司る、それで日本の大國主命の御精神と、此の印度の大黒尊天と其の神徳を調べて見ると一致して居る所があるのは、如何にも神は妙だと思ふ、崇神天皇の御代に疫病が流行つて日本の大國主命の大神力で治つたと云ふ荒神、靈の猛き烈しい神徳の方である、さう云う荒々しい荒神様である、所が此の大黒尊天は梵語で摩訶迦羅尊天と云ひ、此の摩訶迦羅と云ふ事が大黒と云ふ事で、一面大時——絶対の大時間と翻譯してある、是れは南海歸寄傳などを一寸見ますと巽の方に當つて祭つて居る、佛教以前から印度では大黒尊天を祀つて居る

此の大黒尊天は皆が起きる前、夜が明けぬ間に世界を一廻りグルツと廻つて來る、随分はげしい、絶対に時間を活用する神様、其大黒尊天をお祀りする人が、京都時間とか富山時間とか金澤時間とか云う様な狡いことでは可かぬ、摩訶迦羅は絶対の時間である、時間は其の儘幸である、斯う云う意味に見るがよい之れをもう一つ翻譯すると眞黒……暗黒と云ふ意味である、總て寶と云うものは暗い所から出て居る、此の摩訶迦羅尊天は暗黒裡に於いて光明を知らしめ、眞暗の中から寶を與へると云ふ徳であると云う様な説もあります、兎に角七福神として大黒尊天を七人の中に入れて抑の話は後で致しますが、此の事柄は前に知つて置かなければなりません、さて七福神と云ふ化物の様な人達の中、大黒天、辨財天、毘沙門天は印度の神様で惠比壽さんが日本の神様で、布袋和尚、

福祿壽が支邦人で壽老人は人間でも何でもない。

然らば仕うして七福神と云ふ事になつたかと云ふと、是には色々な話があり  
ますが、先づ一番正しいらしいのは天海僧正が徳川家康公に頼まれて、座右の  
銘になることを何か書で現はす様な面白いものを調べたら何うかと云ふ斯う云  
う相談があつた、此の時天海僧正が仁王般若經と云ふお經の中に七難即滅七福  
即生——七難と云ふのは天災地災若しくは海嘯病難火難と云ふ様な七難を即時  
に消滅して七通りの幸福が即時に生ずると云ふ言句がある、此のお經は日本で  
は三冊になつてゐるが矢張り般若經の中にあるものであります、國王が天下を  
お治めになるに就いて釋尊は五穀豐穰國家安泰と云ふ事を言はれて居る、即ち  
仁王般若經を讀みさへすれば、仁王般若經を振り廻しさへすれば五穀豐穰であ

る、又國家が安泰である、さう云ふ結構な事が書いてあります、此の仁王般  
若經の中の七難即滅七福即生と云ふ所から、天海僧正が、是れは面白い事である、  
之れを以て七つの福を與へる所の座右の銘を案出したら面白かろうと云ふ所か  
ら、大黒尊天、惠比壽、財辨天、毘沙門天、福祿壽、布袋和尚、壽老人と云ふ  
様なものを集められたのであります。

それで摩訶迦羅其の儘大黒であります、此の摩訶迦羅は南海歸寄傳にある様  
に厨を掌る神様で、皆が起きない間に喰べる物を用意して與へ給ふ、斯う云ふ  
お勝手を掌る神様である、でお寺の妻君をおだいこくと云ふさうであります、  
おだいこくと云ふのは何うかと云ふと、厨を司りたまふ御婦人であるからおだ  
いこくと云ふ、して見れば何所の奥様でも皆おだいこくとであつて、お寺の妻君

のみがおだいこくでない、苟くも一家の經濟を維持して行く方は皆おだいこくである、中には随分貧乏だいいこくもあるやうである、此の大黒尊天を七福神の中に入れたのは何う云ふ譯であるかと云ふと、南海歸寄傳にある三面大黒とか走り大黒とか云ふ様な深い意味でなくて、大黒尊天の頭の上にある大きい頭巾は上を見ない様に、背の低いのは謙遜を意味して、二俵の俵に満足して居つて、袋を開かない様に、そして打出の小槌を持つて居る、是れは足ることを知ると云ふことを示す爲めに大黒尊天を七福神の中に入れた、足る事を知れば其のまま福の神と云ふ句がありますが、此の足ることを知らしめん爲めに天海僧正は大黒尊天を七福神の中に入れたのであります、高橋泥舟居士に或る人が打出の小槌を書いて貰ひたいと云ふと泥舟居士は即座に打出の小槌を書いて。

この槌は實打ち出す槌でなし

ノラクラ者の頭はる槌

と云ふ讚をした、此のツチと云ふことが面白いです、ツチと云ふのは大地のツチである、物は總て大地より出る、どんな珍らしい物でも大地を離れて天から降つて來るものはない、ダイヤモンドでも何んでも皆土から採つた、土から寶が出る、と云ふ所から槌と云ふのは此の土である、それで土から物を生ずる、土から總ての物を生ずる、土に山あり、土に海あり、土に我々が住んで居る、又我々が歩るいて居る、之れに就いて大徳寺の管長松雲老師が却々面白い事を言はれた、先年萩田さんの死なれた時に「飛行機が墜ちて萩田さんが死なれたさうだが、實に氣の毒なことをした、併し人間が空を歩くと云ふことは無理だ、



人間は土を歩く様に出来て居るのだから、空を歩いたら落ちるに決まつて居る」と言はれた、是れは成程さうである、土の上を歩く者が空を歩いたら何うしても無理が出来、——で色々になります、地藏菩薩は地の藏と書いてある、地藏菩薩とは頭が圓くて肩から袈裟を掛けて居られる方が地藏菩薩でない、地藏菩薩は我の心には大地の物を包藏する如く徳を持つて居ると云ふ所から地藏と云ふ名が付いた、それで大黒尊天の槌を持つて居るのは土から寶を生ずる、此のタカラと云ふ日本の言葉が又面白いです。

ぞうきんと、當て字に書けば、くらとかね

あちらふくく、こちら福々



### 奥山夜話



### 七福神禪話 (其の三)

寶と云ふのは田カラ出ると云ふのである、斯う云ふとおかしい様ですが、日本の言葉と云ふものは、却々洒落たことを云つてゐるのが多い様です、寶といふのも其一つです、寶は何が寶かと云ふと人間の一番寶は命である、命より大切なものはない、其の命を繋ぐものは何かと云ふと、如何に金が寶であつても

金を喰つて生きて居る事は出来ない、或は民地の——或る小さい孤島に非常に  
澤山な寶玉が出る云ふので多くの礦夫を送つた、そして無暗に金礦を掘るこ  
とばかり一生懸命やつて居りまして、其の途中の食物のことに就いては何も考  
へて居なかつた、そこで金だけは澤山掘り上げられたけれども、哀しい事には  
食物を食ひ盡して終に其の多くの人は、金礦を枕にして皆死んでしまつたと云  
ふ話しがあります、で如何にお金か澤山ありましても命がなければ何にもなり  
ませぬから、そこで命を繋ぐ物は何であるか、世界中一番大切な物は何である  
か、人間は生命を何で繋ぐかと云ふと、田カラ出る米で繋ぐ、だからタカラと  
云ふ、即ち命より大切なものはないが、其の命は田カラで繋がる、支那の寶と  
云ふ字はウ冠に、さうして玉編に缶を書いてあります、野蠻時代には金銀細工

など、即ち缶、玉、貝と云ふものが一番大切なものであつた、そこでウ冠の家  
の中では缶と貝と玉とが一番大切だと云ふので寶と云ふ、日本の寶と云ふのは  
日本は瑞穂の國である、田から出るお米が一番寶と云ふ意味からタカラと云ふ、  
こう云ふ様な工合に此の大黒尊天の槌を持つて居ると云ふのも、ツエから其寶  
を打出すと云ふ意味である、それから此の大黒尊天を七福神の中に入れたと云  
ふのは、足る事を知らしめん爲めに大きな頭巾を冠つて上を見な、足る事を  
つて二儀の儀で満足して居れと云ふ所から入れたのである、斯く云ふと今日の  
人はそれでは退嬰主義ではないかと云ふかも知れぬが、そこは此の七福神全體  
を通じて照して見ねばならぬ、此中の毘沙門天は恐ろしい顔をした人で、大抵  
皆様の目に映つて居るのは、立つて槍を持つて居る像が多いですが、毘沙門天

には槍を持つて居る姿ばかりでない、中には寶棒を持つて居られる、此の鐵棒は南天の棒であると云ふ説です、此の鐵棒は何を表したかと云ふと物質上の寶を授けると云ふ意味を表して居る、此の毘沙門天と云ふのは、吠室羅摩拏と云ふ梵語から來たので、ベイシラマ又尊天と云ふのが本當ださうです、毘沙門天と云ふとは天竺語の訛で、支那の言葉に直すと多聞と云ふのである、楠正成は毘沙門天にお禱りをして生れたと云ふので楠多聞と云ふ、多聞と云ふのは多く説法を聞いたと云ふことで、毘沙門天のことを多聞尊天と云ふても宜い、此の毘沙門天を何故七福神の中に入れたかと云ふと、毘沙門天は權威の威望を表して入れたので、大黒尊天が頭巾を冠つて足ることを知るを表すると同時に進んで飽ことくを知らぬと云ふ權威を表したのが毘沙門天を七福神の中に入れた所以

である、毘沙門天の如く進んだ所で大黒さんの如く退いて顧みる所がなければ進む事ばかりでつまづく、又退くばかりで進むことがなければ進歩しない、矢張り相俟つて祀ることが面白い所である、心の一面の欲望に就いては足ることを知り、一方毘沙門天の權威を以て進んで行くこと云ふ二つなければならぬ、進むことは毘沙門天の如く、今日一日を満足して行くこと大黒尊天の如く――「上見れば及ばぬことの多かりき笠きてくらせ人の世の中」と云ふ工合に、又足ることを知る人は必ず仕合宜いに違ひない、それで權威と云ふものを表はしたのが毘沙門天であります、此の權威と云ふのは唯威張ることではない、權威は自分の正しい道を進んで行く時に、自然と人を威服して行く所の力、西洋の方の意味で云ふと正義の力、即ち正義より得た所の力と云ふ意味が權威と云ふこ

とである、日本ではたゞ威張ることが權威と云ふことになつて居るさりであります、それは間違つて居る、權威と云ふのは爲すべきことを正しく努めて行く力である、近い例を云へば床屋さんがお客様の鼻毛を剃つて居る所へ其の友達が行つて——是れは田舎で袴等も能く見ることでありませんが、近所のゴロツキ青年がやつて来て「何うだい寒いぢやないか」とドンと脊中を叩く、さうすると床屋が吃驚して「オイ、そんなことをしてはお客様を傷つけるではないか」と云ふと、餘程横着な者でも眞面目になる、何も床屋は威張りは致しませぬけれども、床屋さんがお客様の鼻毛を剃つて居ると云ふことには非常な權威と力がある、其所へ持つて来て悪い青年が来て悪戯をしやうと思つても「お客様を傷けるぢやないか」と云ふ一言に依つて非常に眞面目に歸つてしもふ、斯う云

ふことはアナタ方もお聞きになるでしやう、丁稚さんでも番頭さんでも夫でも妻でも皆自然に權威と云ふものが繋がつて居る、權威と云ふものは其所にある。袴は先日名古屋に參つて名古屋の驛員にお話をしました、名古屋の驛長さんは非常に修養と云ふ事に熱心な人であります、丁度鐵道線路を横切つて講話會場に袴を案内された其の時に、向ふに旗を振つて合圖をしてゐる職務の者に向つて飯田驛長は帽子を除つて「此所を通らして貰つても差支へないか」今は差支へありません「さうか」と云つて通られた、其の時袴は驛長さんに言つたのであります、「實にどうも結構なことだ、苟も其の人に仕事の分擔をさせてゐる以上は、其の人の權威に對しては如何なる下級の人へでも服従すると云ふ義務がある、向ふの權威を尊重すると云ふことは實に好い心懸だ」と云つてお話を

をしたことがある、一家の事にしても何も彼も奥さん一人で掻き廻さうとするから召使の人達は折角爲し掛けた事でも、やつて宜いか悪いか分らぬと云ふとがある、即ち人の權威を無視することになる、毘沙門天は進む意味と權威を表して七福神の中に入れた、吾身に取つては退いても大黒尊天の足ることを知れ、三度の飯が不味ければ二三日喰はずに居れ、衣服を着るのも流行る流行らぬで着るのではない、裸體を纏ひ身に着られたらそれでよいのである、それを苦面してまで流行を追ふから益々貧乏になるのである、西洋の俚諺にも「缺乏と困難を感じない子供は最大快樂を得ることは難かしい」と言つて居る、實際缺乏を味つたことのない子供は最大快樂を得る資格はない、宜しうございますか、眞實に極樂を知りたい、幸福を得たいと思ふならば、苦しい切ない思をしなけ

ればならぬ、悲しみがなければ嬉しいと言つて喜ぶことは得られない、是れは何れも同じ道理である、であるから大黒尊天の「足ることを知ればそのまゝ福の神」又「足ることをしりからげして働かば貧乏神のつく暇もなし」で一生懸命に働けば貧乏神の居る氣遣はない、閑だから小言が起つて來るのでありますから足ることを知ると云ふのが大黒尊天を此所に引合に出した所以である、

事足れば、足るに任せて、事足らず

足らで事足る、身こそ安けれ。



## 奥山夜話



### 七福神禪話

(其の四)

次は恵比壽さんであります、恵比壽神と云ふ神様は辭書などを見ても一寸見當りませぬが、恵比壽様は少名彦命であると云ふのが一般の説である、少名彦命は神御産靈神の御子で少名と云うも、少ないといふよりは、小さいと云ふ意味で、甚だ小さいお方で、父御神の掌に乗つて常に遊んで居られたと云ひま

す、天の御神であつて地の神ではない、然かし天のどの邊に居られたかと云ふ事は明瞭でないが、高かつたに違ひない、或日のこと例の如く父御神の掌の上で遊んで居られると、ごうした機勢か指の間から地に落つこちた、それから中津國にお居でになりました、中津國を治められた、後には朝鮮に行つて其の地を治めたと云ふ傳説もあります。此方はお咒禁が上手で、それから又藥のことなごをば研究された方である、研究と云ふても、ごうも斯う云ふ方の研究ですから、今日のやうに何ミリメートルの何分の一と云ふ様な事を研究されたのではないが、兎に角藥のこととお咒禁のことを司つて居られた、今でもお咒禁の時には少名彦命を引合に出すのもその爲である。

それでどうして恵比壽さんを七福神の中に入れたかと云うと、少名彦命は日

本の大國主命と兄弟分のお交際をなされた、大國は大黒と音が通ずる所から大國主命を大黒さんとし、少名彦命を惠比壽さんとして兄弟の様にお祀りになるのが日本在來の風俗であるが、此少名彦命は鯛を持つて、而して釣をして居られる、是れは清廉の心の神であるとして七福神の中に入れられた、心を綺麗にして釣して網せず、暴利を貪らぬと云ふ所から惠比壽さんをお祀りする、聖徳太子の時代から商業取引の市場に必ず少名彦命の惠比壽さんをばお祀りする事になつてゐる、夫れから商人は蛭子講と云つて十日に惠比壽さんをお祀りすることになつてゐる、夫れは何故かと云ふと暴利を貪らないで清廉にして商ひを仕様と云ふ所から商人の方々がお祭りになる、如何に店を裝飾致しまして、お世辭を云ひましても、普通一割の利益を得て賣る可きものを五割七割の

暴利を掛けて賣りましたら、永久に其店の繁昌する氣遣ひはない、惠比壽さんをお祭もするのは暴利を貪らない様に、お客さんに便利を與へ様と云ふ心から祀るのである、惠比壽さんの祀つてない商店は繁昌しない、或る所で子供が一錢銅貨を二枚持つて「叔父さん、パンをお呉れ」とパン屋へパンを買ひに行つた、所が其のパン屋は惠比壽さんを祀つてないと見えて、多く儲けやうとし、相手を子供と侮つて、二錢に對して一錢分しかパンをよこさなかつた、所が子供は、毎も二錢で買ふと袋一杯あるに今日は少ないから、「是れは叔父さん間違つて居やしないか」と云ふと、「なに間違ふことがあるもんか、持つて歸へるのに軽くつてよからう」と空うそぶいて居るので、子供は一錢銅貨を一枚投つて「叔父さん勘定するに手数がかゝらんで宜いだらう」と云ふてサツサツと逃げて行つた

と云ふ話があります。

要するに御客様を粗末にしたり馬鹿にしてはいけません、恵比壽さんがお留守である店は繁昌しません、遠からず滅亡するに違ひない、誰にしても然うでありません、外のお店なら一銭でも安く買へるものを、如何に言葉巧みに効能を云つても、如何にオープンチャラを使つても、品物の價が高ければ其の店には再び買ひに行く氣遣ひはない、詰り恵比壽さんが居なければ其店は繁昌しません、是れは大切な事であり、この様に七福神をお祭りしても清廉な考へがなければ到底可かぬ、心を清くして釣して綱せずで、一時に大きな利を得やうとしては、それは長く續くものではありません、子孫の繁榮を圖りたい、家の幾久しく相變らず繁昌いたすと云ふ事を祈る心があるならば、客人の爲めに便利を

圖り、客人を輕蔑しない様にしなければならぬ。

是れは亞米利加の紐育での話ではありますが、世界第一の小賣商店があると云ふ、其家の主人はごんな人であるかと云ふと、以前は鑛山の鑛石掘の労働者であつた、此の人が長年苦心して少々お金を蓄めて、國許の母に何か記念になる可き寶石を買つて歸らうと。卸店か小賣店の大きな店に行つて彼れか是れかと色々選つて、種々考へた末、愈々之れに致しますと云つて代金を拂つて、或る寶石を買ひ夫れを隱囊の中に入れて、フト其所にあつた他の寶石に目が移り其の方を一層慾しくなつた、そこで「是れは折角勘定したけれども、其の寶石に換へて貰へぬだらうか」と云ふと、其家の番頭が「そんな怪しからぬ事があるものか、一旦代金を拂つて買つた以上買つた物は貴方の物だ、それがどうも



可けないから取換へて呉れなど、そんな面倒なことが出来るものか」と傲慢に  
断つた、然し品物は其のお客の衣囊に入れたばかりで、寶石が減りもしなければ  
損みもせぬ、包紙さへ其儘である、それを断り様もあらうのに無解に人を輕  
蔑するとは如何にも心なき所業である、私は今残念ながら自分にどうしやうと  
云ふ力はないが、將來何うかして一人前になつて店を持つ様になつたら、御客  
には満足して歸つて頂くやうにしたいものだといふ考へを起した、夫れから十  
五六年の間一心に勞働に精出して聊かばかりの貯金をして、夫れを資本にして  
信用ある人達に汎くお籠りして店を出して、斯う云ふ箇條書を定めたといふ事  
であります、

一、物品には總て正札を附する事

一、一旦賣拂つた物品といへ共客の希望に依り喜んで他の品と交換する事  
一寸出來難いこととせう。

一、客の便利を圖り、親切、懇誠實に客を待遇する事

一、客の種類如何に拘はらず物品の値段又は其の待遇に差別なき事

此の四ヶ條を基として、聊かの店を出したが、此の精神は既に惠比壽神である、  
此の精神には既に七福神が揃つて居るから、此店は其後、日増しに繁昌して今  
日にては、世界第一の小賣商店となつて、一年の賣上代金が一億萬圓以上ある  
と云ふ事でありませぬ、驚く可き事である、それが僅かな精神の相違から起つて  
來る、斯う申しますと或は其の位のことでは自分でもやつて居ると申される方も  
ありませうが、やつて居ると云ふ傲慢が出るならば、もう其所に隙がある、此

の清廉寡欲と云ふことは却々難かしい事であり、諺に「心を養ふには慾を寡くするより善きはなし」といふ文句があります。張南と云ふ人が心を養ふと云ふ事に就いて斯う云つて居ります。

「思ひを少くして以て神を養ひ、欲を寡くして以て精を養ひ、語を少くして以て氣を養ひ、勞を少くして以て力を養ふ。」

是れは張南の四攝養と云つて支那人の座右の銘となつて居ります。「思ひを少くして以て神を養ひ、欲を少くして以て精を養ひ……」夫れで精神と通ずる、「勞を少くして以て力を養ふ」勞を少くすると云ふことは勞を惜むと云ふのではなくて、無駄な事をば少くして力を養ふと云ふことであります。例へばお錢にしても無駄使ひをしない様にすると云ふことは經濟の力を養ふこと

になる、勞力にしても徒らに無暗に歩くのが宜いのではない、成る可く歩くと云ふことを少くして力を養ふ、言葉を少くして氣を養ふ、是れは善い事であり、之れを張南の四攝養と云ふて居るのであります、惠比壽神は釣し、網せずと云ふ所から清廉の心を以て七福人の中に引合に入れた、殊に大國主命の摩訶迦羅尊天と誤つて兄弟と見做されて居ると云ふ所から天海僧正が採り入れたのである。

おにはそと、鬼は外へと、うち拂ふ

てのうちにくそ、福はありけり。



## 奥山夜話



### 七福神禪話 (其の五)

夫れから辨財天は一名妙音天とも云つて、音樂を司る神様である、夫れで能く琵琶を弾じて居られる圖がある、又一説には印度のガンヂス河と云ふ河をば神様として則ち神格化してお祭りする様になつたのだと云ふ、即ちガンヂス河をば其の儘神様にしてお祭りすると云ふ傳説もある、又此の辨財天は閻魔大王

の妹だと云ふ説もあります、あんな優しい方に閻魔さんの様な兄さんを持つて居られるかと思ふと可笑しい、然し斯う云ふ風に色々説がありますが、兎に角辨財天はお經の中にある「言辭柔順にして衆人を悦可せしむ」と云ふのが根本である、言葉をやらかにして衆人の心を喜ばしむると云ふ徳を持つて居られる、それで此の辨財天を七福神の中に入れたのは、愛忝を表したものである、殊に商人の方は愛忝と云ふものが大切であります、昔士族商と云ふものがありました、たが、之れには随分滑稽な事が澤山ありました、東海道の沼津藩に私の知つて居る人でありますが、廢藩置縣になりました、東海道の沼津藩に私の知つて居る人でありますが、幸ひ汁粉が好きだから汁粉屋を初めた、所が非常に儲つたと云つて喜んで大祝をした、そこで「貴方、何うして儲けたのです」と或人が聞いて段

々調べて見ると米は矢張り昔の領地から取つてお米がたゞだから砂糖と小豆の代金ばかりを見積つて安く賣つたので非常に繁昌したと云ふ事であります。大體士族商と云ふものはさう云ふものであります。又古道具を列べて置いて或人が「此の刀は幾らか」「へい何兩二分であります」「それは高い、もう少し負けて置け」「イヤ是れは元値でございます」「負からなければ止めて置かう」と云つて歸りかけると其の主人が「是れ——商人負けて遣すぞ」と言つたと云ふ話もあります。今日ではそんな極端な方はありませんが、随分氣の短い人は、薄利で商賣するのだから世辭は要らぬと云ふ考へを持つてゐる商人がおります。例へば「要るなら持つて歸へれ」「へい」「氣に入らなければお止めなさい」と云ふ様な人が往々あります、今日商業學校など卒業した方にさうした傾向が多い

様であります、夫れでは商賣にならぬ、商賣にはやはり辨財天の愛忝がなければならぬ、其の愛忝がありさへすれば宜いかと云ふとさうでない、何と云つても御無理御尤、「世の中は左様然らば御尤然かと存せぬさうで御座らう」と云うて居つては可かぬ、其所に矢張り毘沙門天の權威と云ふものがなければならぬ、「此の物を取り換へて呉れ」と云つたならば心よく取り換へてやる、夫れが少々汚れて居つても受取るとすれば、其の時は不愉快でも又不利益でも後で夫れ以上の利益を得る事があるから、そこは大きく心を持ち長く客を得ると云ふ事が肝腎であつて、客に便利と満足を與へると云ふ事は商業上の「標語」である、夫れかと云つて客が大切だからと云つてたゞ無暗に愛忝を振撒いて、客が金も拂はず品物を持つて歸へるのに、どうぞ御持ちなさいと云ふのは馬鹿である、

其の時には毘沙門天の槍を振廻して「コリヤ待てツしとやらなければならぬ、そこで毘沙門天を七福神の中に入れたのである、辨財天の愛忝を持ち、大黒天の足る事を知り、恵比壽さんの清廉と云ふものがなければならぬが、同時に又毘沙門天の槍を揮ふだけの勇氣がなければならぬ、只無暗に槍を揮ふのは危険であるが、是等のものが調和されて、其所に七福神の徳が現はれて來るのである。

よくふかき、人のこゝろと、降る雪は

つもるにつけて、道を忘るゝ。



### 奥山夜話



### 七福神禪話

(其の六)

夫れから布袋和尚のことであるが、是れは誰方も御承知の通り布袋と云ふのは本名ではなく、布袋を下げて居るから布袋と云ふ事になつたので、本名は契此又は長汀子と言つて彌勒菩薩の再來だと云ふ傳説であります、此の布袋和尚は雨の時晴れの時を豫告する、恰度測候所の役人の様な事をして居つた、此の

人が天津橋上に立つて空を見上げて雨降りの用意でもすると、明日は必ず雨が  
散々降る、又少々雨が降つて居つても晴天の仕度をして草履でも穿いて大きな  
袋を擔いでゴソ／＼やつてゐると必ず天氣になる、だからソレ布袋和尚があゝ  
して居るから今に雨が降るだろうソレ天氣になるだろうと言つたと必然其の通り  
であつたと言ふ事である、斯う言ふ風な奇蹟のあつた人で、夫れかと言つて馬  
鹿でもない、夫れから人から呉れる物は何でも彼でも貰らつて皆袋の中へ入れ  
る、傳記によると「總て嗅いで袋に投ず」と書いてあるから、「是れやるぞ」と云  
ふと、一寸香を嗅いで、ニタツと笑つて袋の中に、下駄の切れであらうが、魚  
の骨であらうが、馬の骨であらうが、お錢であらうが、何んでも香を嗅いでニ  
タツと笑つて袋の中に入れる、而して往來に出て、何か金儲けはないかと利を

得るに吸々として居る人に對して、魚の腐つたのなどを一寸出して、「是れ何ぞし  
と云つて指示す、ヒヨイと振り向くと、「我れに一文下んせ」と云ふ、又ボンヤ  
リしてでも居る人があると後から脊中をドンと叩く、吃驚して振向くと、「我れに  
一文錢を與へよ」と手を出すと云ふ風で、酢でも蒟蒻でも喰へない和尚であつ  
た、或人が和尚に、「如何なるか是れ佛法」——佛法の有難いことを聽かして呉  
れぬかと云ふと、布袋和尚は袋をウソと抱え込んでヌツと立つた、そこで「佛  
法の有難いことは夫れか、もう一段垢脱のしたモツト高尚な所を聞かして呉れし  
と云ふと、袋をボンと下ろしてニッコリ笑つて居つたと云ふ、斯う云ふ謎見た  
やうなことは知る人ぞ知る一般の人には分りますまい、お互人間と云ふものは  
重たい袋を皆擔いで居る、且那でも奥さんでも番頭でも丁稚でも、女中方でも

皆夫々相當した重荷を持つて居る、其の重荷を持つてア、苦しいと思つた時、此の袋を一寸下して、心氣一轉腕を組んで笑つて御覽なさい、又新なる精力が出て来る、今日の如き六ヶしい世の中を渡つて行くには、斯くして笑ふだけの餘裕がなければいけぬ布袋和尚は大きな袋を擔いで、呉れると云ふ物は魚の骨であるふが、下駄の片であらうが、馬の骨でも寶物でもボンと袋に入れて夫れを持つて歩く、人が「如何なるか是れ佛法」と問へば、夫れをウンと擔いで見せ、もう一段垢脱けのした高尙の所を聞かして呉れと云へば、ボンと袋を下ろして莞爾笑ふ、此の離氣が無ければならぬ、所が貴方が取扱つて居られる仕事を過つて仕損ふと、ごうも困つたものだと云つて其の事はかり考へて居るから、死んでも其事を心配して居る、其の時に其の重荷を一寸下してハハアと笑つて

御覽なさい、この事はそんなに難かしいものではない、七福神の中に此の布袋和尚を引合に出したと云ふのは度量の大きい所から入れたのであります、腹が大きい、大度なる袋の中に何でも入れると云ふ様に腹を大きくして、其の袋の中に何んでも取込むと云ふ度量の大きい所を以て布袋和尚を入れたと云ふのは確實であります、妻が夫の言ふことを聞かぬ、丁稚が番頭の言ふことを聴かぬ、是れは成程悪い事であるけれども、無茶に怒つた所で仕方がない、さう云ふ時に自分の身體でありながら、右の手は自由が利くけれども左の手は思ふ様にならぬ、我が眼でも自分の目だから自分の心の儘に自由が利きさうなものなれども、説教や講演を聴くと終りまで眼を開いて居ることが六つかしい、斯う云ふ風に自分の身體さへ自由に心に従はぬものである、況んや吾が夫、わが妻、わ

が子、別して他人か自分の思ふ様にならぬのは當然であると思へば夫れで済む事である。

昔播州網干の龍門寺に盤珪禪師と云つて、山鹿素行や大石良雄の參禪したと云ふ有名な坊さんが居つた、此の禪師の所には大勢の雲水が修行をして居つたが、其の中に一人他人の物を欲しがらる悪い心の坊さんが居つた、そして他の弟子共が幾ら意見をしても其の盗みが直らない、そこで仕方なしに其の坊さん達の中でも一番修業の積んだと云ふ坊さんが代表者となつて盤珪禪師の所へ行つて、「何所の國の何の某と云ふ者はどうも盗の誠を犯して人の物を取つて困るから暇をやつて貰ひたい」と云ふと、盤珪禪師は何と思はれたか、ホロ／＼と涙を盗されて、「さうか、夫れならばどうかお前達出て行つて呉れ、此所の道場

に集つて修行する程の者は、善い者ならば修行するに及ばぬ、さう云ふ悪い癖のある者を正しい道に導いてやるのが此の道場である、お前達はもう一人前になつたのだから差支へない、サ、遠慮なくお前達は去つて呉れ、袷と其の盗する坊さんと二人で暮して佛道の修行いたさう」と仰せられた、此の大慈悲の言葉を聞いて其の悪い坊さんも、「ア、私が悪う御座いました」と云つて非常に悔いて、夫れから善い坊さんになつたと云ふ事である、人を指導するもの、多くの他人を預つて引立てやうとする者は、若し其の中に悪い癖の者があれば我子の様に親愛の念をかけてやる様になければ駄目である、是は舊い話でありませんが、斯くの如くごんな者でも取つて以て我が度量の中に入らなければならぬ、彼の大海は細流を選ばず故に深しで、又彼の大山は小さな石塊でも



容れる、斯う云ふ風に大山は小石を斥けず大海は細流を選ばぬ、此の宏大な度量を持つことが必要である、恰も布袋和尚が大きな袋を擔いで、何んでも其中に入れて、ニコ／＼笑つて居る様に、是程の度量と洒脱があつて欲しいものである。

げにまこと、とくは堪忍、ごまんざい

愛敬有るこそ、目出度かりける。

ながいきは、たゞはたらくに、しくはなし

ながるゝ水の、くさらぬを見よ。



### 奥山夜話



### 七福神禪話 (其の七)

又此布袋和尚に就いて面白い話がある、或日袋を擔いで橋の上に立つて居つた、さうするに道吾と云ふ和尚さんが「何をか爲す」と尋ねた、すると和尚は「箇人を待つ」と云つた、そこで道吾和尚は「來耶々々」こゝに乃公が來たが如何じや」と言つた、所が布袋和尚曰く「汝は是れ箇人にあらず」貴様の様な人間じや

ないよと言はれた、道吾和尚もコーやられては一寸方角が解らぬ、此の「箇の人を待つ」と云ふ所に何とも云はれぬ甘味がある、「フーン箇の人を待つか、俺が此所へ来たじやないか」、「汝は是れ箇人にあらず、すると道吾は又「怎麼生が是れ箇の人」、それならば箇の人とはどんな人じやと切りかけた、布袋和尚聲をばげまして威を振つて吾に一文錢を與へよとやらかした、此の吾れに一文錢を與へよの一文錢は盡天盡地世界中の寶にもかへられぬ一文錢であり、一生受用不盡の一文錢である事を承知せなければならぬ、此の布袋の如く度量を大きくして魚の頭の腐つたものでも、下駄の端くれでも何でも貰つたものは一寸香を嗅いで、ニタツと笑つて袋の中に入れてと云ふ、此の度量を養はなければならぬ、其の度量を大きくするには其儘勘忍の修行をもせなければならぬ、

其所に辨財天の柔和が必要である、柔和な人には現在の生活から最大恩寵を得べき約束がある、殊に御婦人方には柔和がなければならぬ、柔和の二字は最大享樂の世界に通ずる所の一大王道である、是れが辨財天の柔和である、又柔和な人は多數の人に指彈せられても、蔑しめられても、決して之れをば輕蔑せられると云ふ感情を持たぬ、所が傲慢な人は一寸頭の低げ方が少なくて輕蔑したと云つて、非常に之れを残念がる、柔和な人はさう云ふ感情を超越して居るから何とも思はぬ、だから快樂を受け得ぬ人は布袋の大度量のない人である、顔に愛嬌を現はさぬ人は度量のない人である、瘡癩の起つた時には又さう云ふ人は、腹を大きくして愛嬌をもつて埋合せなければ、折角七福神を作つて呉れた天海僧正に對しても申譯がない、腹の大きいと云ふ所から自然柔和と云ふも

のが起つて来るに違ひない。

其の次には福祿壽である、此の福祿壽の事蹟はハツキリしないが、兎に角頭の長い人である、或日旅に行き暮れて或家に一夜の宿を借りた時、座敷に寝られず庭に寝たが、庭の戸を閉めたら頭が一尺ばかり出た、夜分の事であり八百屋の事ではあり買物に人が来て「若しくこの唐瓜はいくらか」と尋ねたら、八百屋が家の中から「へい夫れは福祿壽であります」と答へた、すると福祿壽を百六十と間違へて「百六十では高價からモウ少しまからんか」と云ふと主人は又「間違へて曲るなら内へ入れて寝させます」と云つたと言ふ落語があるが面白い、皆様は頭は長くはないが我慢の頭は皆長い夫れでは可かぬ、我慢の頭は短かくしなければならぬ、私が信州に参りました時、白隠和尚が福祿壽に讚

をせられたのを見たが曰く「長い」と皆様おしやる、わたしや然うとも思はぬに——とお互我慢の頭は長いと思はぬ、皆自分の頭は低いやうに思うと濟して居るが、奚ぞ知らん自分の我慢の頭は福祿壽の様に長いのである、兎角我慢の頭が長いと一家は治まらぬ、一家を治めるには家内中が手を組んだ様にして行かなければならぬ、手を組んだ様にして行くには長いものは長いなり、短かいものは短かいなりに手を組んで行けば夫れでよい、或る財産家に二人の兄弟があつた、所がその親爺が死ぬると云ふ時に其の二人を枕頭に呼んで、家の財産をお前等二人にやるから之れをば平均して兄弟で分けたら宜からうと云ふ遺言を残して死んでしまつた、後に残つた兄弟は「俺は兄だから俺の方へ餘計寄越せ」と云ひ、弟は弟で「二人で貰つたのだから」と云つて互ひに譲

らぬ、それで其の財産の分配で非常な争ひが始まつた、すると伯父さんがやつて来て、「お父さんの葬式が済むか済まぬに争ひをする奴があるか、そんな争ひをするならば俺が引受けてやるから委せろ」、「よろしう御座います、それでは伯父さんに委せませう」と云ふ事になつた、すると伯父さんは刀を持つて来て、柱も何も家の物を皆んな残らず二つにバン／＼と割つてしまつた、さう云ふ風で我慢が強くて俺が／＼をやりますと、遂に間に合ふ物も役に立たぬ様にしたければ治りが着かぬ様になる、兎に角此の福祿壽を云ふ人は非常に人望のあつた人でありませう、だから一家の者に間違があつて、布袋の如き大度量を以てそれを容れなければならぬ、布袋の如く度量があれば自然辨財天の愛嬌も出来て来る、辨財天の愛嬌があれば自然恵比須神の清廉の行も出来る様になる、さ

う云ふ工合にして行くと、又自然大黒大の足るを知つて行くと云ふことになる、此の度量、愛嬌、清廉、人望、知足それからも一つ毘沙門天の權威、此六つを具へて居れば先づ人として立派な人格の人である。

併し乍ら幾ら人格のある人であつても、生命が無くてはならぬと云ふ所から、南極星は不老不死で長壽であると云ふので壽老人を此所に入れた、然し人と生れた以上は死を免れる事は出来ないが、せめて生きてゐる間なりとも、言ひ換へますと七福神を皆さんがお祭りするのは、皆さんが希望なり、福德なりを現在に得たい、と言ふの外はありませんから之れを祭るに、足ることを知り清廉に、さうして愛嬌と權威と度量と人望と、此の六つを持つて、又衛生にも注意して長命する様に心懸けなければならぬ、人間はお金が澤山あるのが人間の仕

合せではありませぬ、又衣服が澤山あるのが人間の仕合せでもありませぬ、然し多くの人達は此等を以て人間最上の仕合せだとして居るが、さうではありませぬ、譬へ竹の柱、萱の屋根で暮しましても足ることを知る心、清廉の心に愛嬌を持ち、さうして布袋の如き度量、進む時には毘沙門天の權威を持ち、退いて満足すゝ事大黒天の如くあれば、夫れが人生の最大幸福であるのであります、又是れが七福神を祭つて居る趣意なのであります、却々さうは行かぬ、形の上では七福神を祭つて居るが、心には七福神を祭つて居らぬ、それでは何にもならぬ、ウエルレスレイと云ふ人は彼のウエリントンの親戚の人であります、ミソルと云ふ所で戦争した時に其勞に酬ゆべく十萬兩の賄賂を贈つた、其の時にウエルレスレイと云ふ人はこう云つた「此の大金の賄賂を私が貰ふと云ふ

とは百萬の鋒尖に突かれるより苦しい、私一人之れを取るべきものでない、私は只外の兵卒の安泰、外の兵卒の幸福を祈るのが私の役目である、假令十萬兩が百萬兩でも我身一人で取ることには出来ぬ、と云つて斷つたと云ふ事である、斯う云ふ事は一寸出来ぬ事でありませぬ、餘程教育のある人でも斯う云ふ立派な挨拶は一寸出来ませぬ。

わがよきに、かの悪きは、なきものと

かんにんするが、家の福德。

きみにちう、親に孝ある、人しあらば

みのかさもやろ、槌もふくろも。



## 奥山夜話



### 七福神禪話

(其の八)

昔、徳川時代のことであるが、或士族が浪人して七歳ばかりの男の子を連れて兩國橋の袂に蒐ると、其所に焼芋をばボク／＼と暖かさうにおいしさうに焼いて居る店があつた、然るに其の浪人は誠に尾羽打枯した姿をして、大小刀は差して居つたが、お錢が一文もない、すると子供は、「お父さん、あの芋が欲し

いヨ／＼」と言つて泣き出した、侍は涙をハラ／＼と零し、「坊や、お錢がないからこらえておくれ、武士の子と云ふものは腹が空いても辛抱するものだよ、坊や、お腹は空いたらうがどにかく辛抱してお呉れ」と其の侍が泣いて言つても何分幼い子供だから武士の子が何であらうと、何とあつても分らない、其の子供は地團駄踏んで泣き出した、「世が世ならば薩摩芋ぐらひ喰べさせられぬでもないが、坊や勘忍して呉れ」と子供の肩に縋つて泣き出した、子供は又、「お父さん、坊は昨日も今日も御飯を喰ないんだものお芋一つぐらゐ喰べたいな」と云つて父の袖を顔にあてて泣き出した、其の様子を一人の非人が見て居りましたが、「恐れながらお武家様、斯う云ふ非人奴が物申しては誠に失禮で御座います、私も斯う云ふ非人ながら一人の子がおります、食物の無い時ぐらゐ其

の子に對して切ない事はありませぬ、誠に恐多いことでありますが幸ひ持合せの錢がございますから、是れでどうぞお坊様にお腹の脹れるほどお芋を買つて差上げて下されと言つて乞食が鳥目を差出した、侍の心はどんなであつたらう、身に大小刀を差して居りながら三度の飯はおろか焼芋一つ買つて可愛い子に取らすことが出来ぬかと件の侍は心の中で暫く考へて居つたが、「誠に夫れでは濟まぬと思ふが、折角の志だから拜借いたさう」と、乞食から少々の錢を貰つて、焼芋を買つて其の子に喰べさせた、其の如何にもおいしさうに食べて居る子供の顔をつくづく見て、「坊や坊やお腹か脹れたかし」と云ひ乍ら武士たる者が――世が世なれば素町人土百姓と威丈高に威張つた武士たるものが、理由なくして人の惠みを受くべきでない、然も人もあろうに非人乞食の前に手を下げて御禮

を言はねばならぬ生がいない今の有様、誠に有難かつた、腹が空つては換へられぬ、我身は辛抱しても我が可愛い子には換へられぬ、お蔭で満足した、此の御恩は死んでも忘れ申さぬ」と、其の侍は涙を流しお禮を云つて、而して走つて行くかと思ふと、ツト其の子をば兩國の橋の上から逆に投げ込み我が身も河の中に飛込んで兩人とも死んでしまつた、是れは武士たる者が人の惠みを理由なく受くるのみならず非人乞食に惠を受けて子供を養ふと言ふのは武士道に對して恥すべき事であると云ふ所から遂に其の恥辱を雪ぐと云ふ積りで死んだと云ひますが、是れは其の當時江戸中に評判であつたと云ふ事である、物貰ひでさへ我子を養つて居るに、武士たる者が自分の可愛い子供を養ふことが出来ず、非人乞食から惠みを受けたとあつては祖先に對して濟まぬと云ふ所から我子を

川に投げ込み、自分も後から飛込んだと斯う云ふ清廉の心、斯う云ふ美しい權威を持つて居るならば、武士は喰はねど高揚子である、武士のみでない、商人でも大工でも百姓でも此の氣概がなければならぬ、此の精神がなければならぬ、此の活ける毘沙門天の權威と、惠比須神の清廉の心とを持ち、我が身に足るを知る事大黒天の如く、人に對して愛嬌のある事と辨財天の如く、人を容れると布袋の如く、徳望のある事と福祿壽の如くにすれば人間に申分はないのである、されど壽命がなければ何にもならぬから衛生に注意して、長生すると云ふ事は大切である、併し限りある身が限りない時間の中に生棲する、無限の時間の中に出て来て、須臾にして我々の命は減じてしまふのだと思へば、清廉寡慾といふことも容易く出来るものだと思ふ。



### 奥山夜話



## 七福神禪話

(其の九)

西洋の芝居に「誰れでも」と云ふ一幕物がある、襦は観たとはありませんが非常に面白いさうである、今其の概要を申しますと斯うである、幕がズツと開くと七五六歳になる此の劇の主人公たる書生風の男が一人出て来る、さうすると骸骨に衣を着せた様な男が太鼓を持って又出て来る、さうして互に顔を見合



はすと、太鼓を持つた男が「是れ〜儂は神の命令に依つて此の太鼓を叩くのであるが、儂が是れをひとつドーンと叩けば一ツづゝ人間の命が無くなる、可哀想にお前の命も今一時間経てば——儂が之れをドーンと叩けばお前は死ななければならぬ」と云つてズツと其の骸骨は消えてしまつた、そこで其の廿五六になる男は「吁、あゝもう一時間で自分の命は無くなるのだ、もう一時間——もう一時間経ては自分の生涯は了るのた、さて此の一時間——どうしたら宜からう」と煩悶して居る所へ友達がやつて来て、「オイ君、喜べ、君の書いた論文が到頭採用になつて愈々君は文學博士になるのだ、喜び給へ」と云ふと、其の男は、「イヤ、何が嬉しいものか、俺の命はモ一後五十分で無くなるのだ、文學博士にするものぞ何にがうれしい」と言つて大悲觀、折角喜ばさうと思つて

やつて来た友達も呆氣に取られて往つてしまふ、其の後で其の男は時計を出して恨めしさうに眺めてゐると、其所へ伯父さんがやつて来て、「オイお前、例の裁判が永い間——つたが到頭此方が勝利になつて、結局あの財産がお前の財産になつたのだ、お前は今日から何百萬圓の財産家になるのだぞ、喜べ」と云ふと、「吁、自分の命も後四十分になつた今に至つて財産何するものぞ」と云つて取り合はぬ、折角喜ばさうと思つてやつて来た伯父さんも手持無沙汰で悄悄と歸つてしまつた、其の後から飛び付かんばかりに、花を欺く様な美人が追駆け来て側で坐るや否や、「貴郎、喜んで下さい、長い間行惱んでゐました結婚問題がヤツと片付いて、今日から妾は貴郎の妻です、どうぞ可愛がつて下さい」と云つて手を取ると、夫れでも嬉しい顔をせぬ、「自分の命は後十五分しかない、

家内何するものぞ」と云つて喜んで呉れぬので、其の美人も到頭行つてしまふと云ふ所で、ドーンと、太鼓で幕になると云ふ一時間一幕物である、是れは西洋の話の様でありますが、我々とても亦五十年七十年の瞬時の命であります、ドーンと一ツ太鼓が鳴るか鳴らぬか分かりませぬが、ドーンとなつて命を引取る時には文學博士何するものぞ、巨萬の財産何するものぞ、容貌のよい奥さん何するものぞ、壽命がなければ金殿玉樓も何かせんやである、貴賤を問はず誰れでも死ぬ事は脱れない、そこで七福神の中に壽命の長くなる様にと云ふので、壽老人を入れてあるのだと思ひます、然し壽命は限りあるものである、限りあるものとすれば、我々は此の限り無い世界に、此の限り無い時間に、限りある身體を持つて来て、限らない仕事をしようとしてゐるのではあるまいか、然り

此の身體は有限のものである、有限ではあるけれども、爲し置いた仕事は無限に永遠に生命を持つものでありますから、此短い命の間に、誠實に總ての事に當つて永遠の生命を得なくてはなりません、それには皆様は七福神をお祭りなさねばいけません、自分の事で不平不満が起りましたなら大黒天に對して恥づべし、ムラ／＼と疝癢が起つたならば辨財天の愛嬌を思ひ出し、又あんな奴が来たかと思へば布袋様の大きな腹を想像する、斯う云ふ工合に心懸けて行けば自然人間の心は七福神の様に完全な人格になつて行くのである、自分の心を七福神が取り巻いて、内に七福神が遊んで居るとすれば、願はない迄も禍を轉じて福とすることが出来る、斯うしてこそ初めて歡喜に満ちた生活を送ることが出来る、そして袴子が前後八回にわたつて、駄辯を弄したのも無意義でない

291  
281

と思ふ。(をばり)

- うへを見ず、かせぐ打出の、小槌より、よろづのたから、わき出づるなり。
- 足ることを、しりからげして、身を軽るく、よくのうすきに、福と毒はあり。
- われさいふ、こゝろの鬼が、つりのりなば、なにさて福は、うちに入るべき。
- 福はうちこ、口には云へど、こゝろには、鬼をだかへて、豆はやすなり。
- かせますと、かへしませんで、こまります、現金ならば、安くうります。
- かりますと、もらつたやうに、思ひます、現金ならば、よそで買ひます。
- つ、しんで、家業如來を、たいせつに、つこむる家ぞ、ふくじゆ極樂。

大正十一年十二月二十五日印刷  
大正十一年十二月二十七日發行

〔定價金貳拾錢〕

不許  
複製

編輯者 兼 靜岡縣引佐郡奥山村百十四番地 戸倉石鼎  
印刷者 東京市京橋區築地三丁目十五番地 犬塚茂三郎  
印刷所 東京市京橋區築地三丁目十五番地 株式會社中屋印刷所

發行所 靜岡縣引佐郡奥山村正法寺  
賣捌所 東京市神田區猿樂町一ノ二 振替東京二三一三番  
嶺雲溪月會  
光融館

終

